



		5		4		3				2			
⑥	悲痛	①	穀類	①	みやこ	①	ウ	問八	イ	問六	頭	問一	ウ
	65		60		55		50		46		44	問二	37
⑦	農耕	②	改善	②	いばら	②	エ	問九	自分		で	1	38
	66		61		56		51		47		は	2	39
⑧	簡素	③	短縮	③	めがね	③	イ		47	問七	なく	ウ	40
	67		62		57		52		47		想像	3	41
⑨	退	④	庁舎	④	うだつ	④	オ	問十	ウ		力	問三	42
	68		63		58		53		48		・	イ	43
⑩	染	⑤	財政	⑤	おんど	⑤	ア	問十一	工		創造	問四	42
	69		64		59		54		49		力	問五	43

(配点)

①〔問一〕各2点、〔問五〕各3点、  
〔問六〕7点、他各5点  
②〔問二〕各2点、他各5点  
③④⑤各2点

計150点

【解説】

1 工藤純子の「ルール！」(講談社)から出題しました。

中学で文芸部に所属する知里は、学校帰りの利用をとがめられてスマートフォンを没収され、反省文を書くように言われます。納得のいかない知里は自分たちをしばる校則のおかしさに気づき、文芸部の仲間や生徒会のメンバーを巻きこんで、校則の見直しを訴えることとなります。本文は「中学生の主張」というイベントで知里が校則に関するスピーチを行う場面です。

問一 B1 関係つけ 比較

適切な副詞を空らんに入れる問題です。

i 知里がいよいよ発表の番をむかえ、緊張している場面です。実際に光が出ていっているわけではないもの、「息が苦しい」「頭の中が真っ白になった」という前後の表現と合わせて考えると、目の前で光がいたり消えたりするような感覚になっていると思われれます。したがって、エ「ちかちか」が入ります。

ii スマホを没収され、反省文を書いて読み上げさせられることになった件について、知里はスピーチで「見せしめようだと思いました」と述べています。明らかに学校に対して反発する姿勢が見てとれる発言ですから、聞いている生徒や先生たちは「えっ？(今すごいこと言った?)」という反応になるでしょう。したがって、オ「わざわざわ」が入ります。

iii 直後の「起こしてしまったかもしれない」から、寝るこ

とに關係する表現が入ると思われます。ウ「うとうと」が入ります。

問二 B1 理由 比較

——線①の四行後に「だからこれは、あたしたちのせめてもの氣遣いだったんだけど」と書かれています。この部分の「これ」が——線①の内容を指しています。「前もって見せたら反対されただろうし、仮に賛成してもらったら、松島先生の責任も問われてしまう」を参考にすると、自分たちの思いを通しつつ、松島先生にも迷惑がからないようにしたいという知里たちの気持ちが読み取れます。したがって、アが正解となります。イ「賛成してくれるとは思えなかった」、エ「それが発表にふさわしいものかどうかいまち確信が持てなかった」がそれぞれ誤っています。また、ウは松島先生に責任を負わせたくないという気持ちにふれていないので、答えとしてはふさわしくありません。

問三 B1 関係つけ 比較

② 直後の「先生を疑うような思いがこみ上げ」が大きなヒントになっています。直前の段落で知里が述べていることと合わせて考えると、「スマホでインターネットを使用する前に止めようと思えば止められたはずなのに、わざと校則違反をするのを待っていたのではないか」というような内容が入ることがわかります。したがって、エが正解となります。ア「模範的な行動を期待していた」、イ「わたしを反省させる」、ウ「わたしを油断させる」がそれぞれ誤っています。

問四 B1 具体化 比較

「直前で知里がどのようなことを問いかけているかに注目しましょう。知里は、「先生方は、そんな答えに疑問を持たないわたちでいいと思いますか?」と問いかけています。先生たちの立場からすれば「校則だから」で生徒が納得してくれば楽だ、というのが正直な立場でしょう。ただ、このように問いかれるとこれ以上「校則だから」で押し通すのは無理です。きちんと知里たちを納得させる答えを用意しなければなりません。それでも先生たちが「校則だから」以上のきちんとした理由を説明できるなら堂々としていきますが、「うつむき、さりげなく視線を外す」という行動からは、「痛いところをつかれた」「そう言われてしまうと返す言葉がない」という自信のない様子が読み取れます。したがって、イが正解となります。ア「他の先生をどのように説得すべきか分からず」、ウ「生意気だと感じ」、エ「問いかけが理解できず」がそれぞれ誤っています。

問五 A2 知識 比較

語句の意味を答える問題です。辞書の意味をもとにして、文章中の意味をとらえましょう。本来の辞書的な意味から外れている選択肢が答えになることはありません。両方を満たしている選択肢を探すようにしましょう。

④ 「血相」は「けつそう」と読み、「顔つき・顔色」のことです。「血相を変える」で、「驚きや怒りで顔色をかえる」という意味になります。したがって、ウが正解となります。

⑧ 「水くさい」は、親しい間柄(わがやう)なものによそよそしい、という意味です。知里たちとのやりとりの場面から、他の先生に比べると松島先生は生徒に近い存在であることがわかります。そのように近い間柄なのに今回のスピーチの件を知らせてもらえなかった(それ自体は知里たちの立場からすれば「気遣い」ですが)ことがよそよそしい、ということでした。したがって、イが正解となります。

問六 B2 具体化 推論

知里が「語気を強めて」言った内容や、その後どのようなスピーチを続けたかについて、ていねいにおさえましょう。

——線⑤直前で「でも、わたしはあきらめたくない」と考え、直後で「反抗的(はんかうてき)で、生意気だと思われるかもしれない。でも、これは絶対に言わなければいけないこと」と自分に言い聞かせ、「わたしたちは一方的に抑えつけてもいい存在ではありません。子どもにも、人としての権利があります」と続けます。したがって、全体としては(大人に対して)絶対に言わなければならぬ、絶対に言おう、という形を取り、その内容として、子どもにも、人としての権利があるということとを盛りこむ必要があります。

同じく——線⑥の直前に「大人はわたしたちの言うことなんて聞いてくれないと思う人もいるかもしれません」とありますが、この部分は大人に対してではなく、スピーチを聞いてくれている同じ世代の中学生に対しての発言ですから、解答に入れる必要はありません。

※設問の指示や字数・文字指定に従っていないものは不正解とします。ただし、誤字脱字(ごじだつじ)が一つの場合は減点1点、二つ

ある場合は減点2点、それ以上は不正解とします。また解答の説明に過不足がある場合は減点2点とします。

問七 **B1** 関係つけ

知里が「学校に提出」するものとは何か、ということが最も大きなヒントになります。知里がスマホを没収され、反省文を書いて提出しなければならなくなったことが、校則見直しのアンケートをとる活動を始めるきっかけでした。今回のスピーチの最初で、知里はスピーチに「わたしの反省文」という題名をつけています。字数条件も合わせると、ここが答えになります。

※書き抜き箇所が正解でも、誤字脱字がある場合は不正解とします。

問八 **B1** 具体化 関係つけ

——線⑦の直前では、スピーチを聞き終えた生徒たちから「アンケート、書くからねー!」「オレも」「必ず」という声が上がっています。これらの声を聞いて「こみ上げてくる思い」が生じているので、その思いとは「自分の伝えたかったことがきちんと伝わったうれしさ、充実感<sup>じゅうじつかん</sup>」であるということがわかります。したがって、空らん前後の内容と合わせると、知里が生徒たちにスピーチをどう届けたいか、どう聞いてもらいたいかを考えている部分を探せばよいこととなります。——線④の八行後に「自分に引き寄せ、自分のこととして想像してほしい」という表現が見つかります。

※書き抜き箇所が正解でも、誤字脱字がある場合は不正解とします。

問九 **B1** 具体化 比較

——線⑨をふくむ松島先生の発言は「いい主張だった。オレも久しぶりに、中学のときの気持ちを思い出したよ」というものです。「も」に注目すると、松島先生の言う「中学のときの気持ち」は「いい主張」と評価された知里のスピーチにこめられた気持ちと同じものであったらうということがうかがえます。これをふまえて選択肢を検討すると、ウが正解であるということになります。ア「大人になることにある」がれる、イ「中学生らしさ」は自分たちの手で作り上げよう、エ「立派な中学生になることを夢に見る」がそれぞれ誤っています。

問十 **B1** 具体化 関係つけ

——線⑩の「それ」は、直前の「どんな大人もかつては中学生だった」を指しています。この場面でまさに松島先生が述べているように、自分たちを校則でしばらくとしている大人も、かつては大人から抑えつけられ反発した中学生だったということなのです。そうであれば、自分たちが抑えつけられて苦しい、いやだ、という主張を受け入れてもらえる余地はあるのではないか、というのがここでの「希望」です。空らん「決まりや理想像によって」に続いていきますから、「しばられる、抑えつけられる」といったニュアンスの言葉を探すこととなります。字数も合わせて考えると、3ページ下段の「がんじがらめにされた」がふさわしいことがわかります。

※書き抜き箇所が正解でも、誤字脱字がある場合は不正解とします。

**2** 広瀬浩二郎 相良啓子『よく見る人』と「よく聴く人」――共生のためのコミュニケーション手法』（岩波書店）から出題しました。

出題部分は、全盲の視覚障害者である広瀬浩二郎さんが、自分の小学校時代を中心に、声や文字との向き合い方について述べる内容です。

問一 **A2** 知識 関係づけ

① 直前の「弱視学級は、僕が入学する1年前にスタートしたばかり」をふまえると、ここには「まだどのように運営していくかを探ってあれこれやっている状態」というニュアンスの四字熟語が入ることがわかります。したがって、ウ「試行錯誤」が入ります。

問二 **B1** 関係づけ 比較

空らんにあてはまる接続詞を考える問題です。前後の内容どうしのつながりに着目し、接続詞そのものの働きと合わせてふさわしいものを選びましょう。

《 1 》の直前には、子どもたちが「障害」について知識を持っていない、という内容、直後には「偏見のない自由な発想で『違い』を受け入れることができる」という内容が書かれています。前の内容が後の内容の理由になっていますから、イ「だから」が入ります。

《 2 》の直前には、弱視学級の教員からの「早く点字を習得するように」というアドバイスや実際に触読の手解きを受けていたことが述べられています。これに対し、直後では

点字を使うことに抵抗があり、点字を使った学習になかなかふみきれない様子が書かれています。前の内容と相反するような内容が後に続いていますから、ウ「しかし」が入ります。

《 3 》に続く部分の「あるいは」「（立ちっぱなし）でも」に注目すると、「耳による読書」の良さを並列の形で次々と紹介していることがわかります。したがって、エ「また」が入ります。

問三 **B1** 具体化 比較

「広瀬ルール」とは、筆者が野球に参加する時に、バッターの時はピッチャーがゴロを投げることで、守備の時はボールにさわったならアウトにすること、という特別ルールが設けられたことを指しています。これは、視力が低い筆者がみんなと同じように野球に参加するために考えられたルールです。視力が低いから参加できないと考えるのではなく、視力が低い人はどうすれば参加することができるのか、という視点が「障害者雇用を促進」するうえでヒントになる、ということですが、したがって、イが正解となります。ア「障害を持っているかどうかに関係なく」、ウ「同じルールに従ったうえで」、エ「厳しく取り縮まればよい」がそれぞれ誤っています。

問四 **B1** 関係づけ 比較

複数箇所の空らんにあてはまる言葉の組み合わせを選ぶ問題です。決め手に欠ける空らんにこだわらず、考えやすい空らんから答えを決めていくとよいでしょう。最終的に選んだ選択肢をそれぞれの空らんに入れ、問題なく意味が通ることも確認しておきましょう。

③ 直前には、筆者が人一倍「見る」努力をしていたことが述べられていますが、「とはいえ、見て情報を得るには時間、手間がかかる」とそのデメリットが続けられています。もちろん見る努力はするが、もつと効果が上がる方法として、集中して先生の話を聞く必要があった、ということでしょう。したがって、ここには「必然的」が入ります。

⑨は「目による読書」で「外から」、⑩は「耳による読書」で「内から」作品世界に触れることを表しています。外からやってくる情報は自分が「受け止める」ものですから「客観的」、内から出てくる情報は自分が「生み出す」形になりますから「主観的」が当てはまります。

以上のことから、イが正解となります。

問五

B1 具体化 比較

線④で「誤解がないように」と述べた後で筆者がどのようなことを述べているかを確認しましょう。直後には「男声に対しても『ああ、いい感じ』という印象を持つことがしばしばあります」と書かれています。ここから考えると、筆者の想定している「誤解」とは、「この人は女性の声だけを『いい感じ』と考えているのではないか」という内容であると思われまます。したがって、エが正解となります。ア、イ、ウはどれも筆者の想定する「誤解」とは関係がありません。

問六

B1 置換

聞いたものを「音の塊」としてとらえることについては、線⑤の次の段落に書かれています。字数条件も合わせると、「つまり」直後の「頭ではなく、身体で記憶する」という

こと」が当てはまります。

※書き抜き箇所が正解でも、誤字脱字がある場合は不正解とします。

問七

B1 関係づけ

耳で聞く情報が曖昧であることから、集中力が必要であることは③前後にも書かれていました。その他に大切なこととして、線④の前後では「想像力・創造力」について触れられています。直前の「集中力」と「○○力」という形が合っていること、字数条件を満たすことから、この部分が答えとなります。

※書き抜き箇所が正解でも、誤字脱字がある場合は不正解とします。

問八

B1 理由 比較

筆者は、本来「百聞は一見に如かず」という表現をひっくり返して「一見は百聞に如かず」という形にして使っています。筆者は世の中の流れが視覚優位にかたむいていることを批判し、否定的にあつかわれがちな「耳学問」を自分が追究してきたことに自負を持っています。したがって、その内容が過不足なくまとめられたイが正解となります。ア「両方を等しく大切にすべき」、ウ「どちらが大切なのかをその都度見分けることが大切」、エ「目から入ってくる情報も大切にしている」がそれぞれ誤っています。

問九

B1 具体化 関係づけ

視力が下がったことで本を読めなくなってしまう筆者は、

現在「耳による読書」を楽しんでいることが述べられています。空らんとつながりを考え、——線⑧以降の部分を「耳による読書ではどんなことが体験できるのか」という観点で読み進めていきましょう。——線⑧の十二行後に「あたかも自分が作品の中に入り込んでいくような感覚にとらわれるのが、耳による読書の特徴です」と書かれています。字数条件と空らんとつながりを考えると、「自分が作品の中に入り込んでいくような感覚」が当てはまります。 ※書き抜き箇所が正解でも、誤字脱字がある場合は不正解とします。

問十

**B1** 関係つけ 比較

ぬけている文をもとの場所にもどす問題です。指示語や接続語、キーワードに注目して、ぬけている文と内容的に近い内容が書かれている部分を探しましょう。また、実際に文をもどして読み直し、内容的にふさわしいかどうかを確認しておきましょう。

今回の脱文中には「価値基準が多様であること」の良さが述べられています。「ア」～「エ」の直前を、この内容が書かれているかどうかという観点で検討すると、「ウ」の直前に「想像・創造の仕方は人それぞれ、自由でしょう」という表現が見つかります。

問十一

**B2** 抽象化 比較

本文の内容と合っている選択肢を答える問題です。選択肢の内容と本文のどの部分に対応しているのかを考え、必ず本文と照らし合わせて正誤を検討しましょう。

エは、問八でも見たように「目学問」より「耳学問」の良さを強調している筆者の姿勢と合っています。ア「小学6年生まで盲学校で過ごした」、イ「それをよく見て」、ウ「点字を習得すること」がそれぞれ誤っています。

**3** A1 知識

熟語の組み立ての問題です。

- 1 上下が似た意味のものになっている (①創る十造る)
- 2 上下が対の意味になっている
- 3 上が主語・下が述語になっている (④公が立てる)
- 4 上が下を修飾している (②早い十朝)
- 5 上が動作、下が動作の対象になっている (⑤顔を洗う)
- 6 上が「不・無・非・未」という否定の接頭辞で下を否定している (③無十風)
- 7 下に「的・性・化」などの接尾辞がつく
- 8 長い単語が省略されている

という組み立ての形をそれぞれ覚えておくようにしましょう。

**4** A1 知識

□にひらがなを入れて慣用句を完成させる問題です。言葉そのものを覚えておくだけでなく、意味とよく使われる場面を合わせて覚えておきましょう。